

中・高等学校国語科における論理的文章教材の開発

Development of the logical sentence teaching materials in secondary school

長谷川 祥子／田邊 泰／加賀谷 いづみ／西山 明人
Sachiko HASEGAWA／Yasushi TANABE
Idumi KAGAYA／Akihito NISHIYAMA

1 高等学校国語科授業の課題

高等学校の国語科授業は若手教員が作成した学習指導案や、私立学校の授業実践等の報告を確認すると二極化が進んでいると思われる。十年以上前に月に数度、東京都立高等学校の授業を観察していた時期に比べると、授業の差が広がったといえよう。高等学校学習指導要領国語の指導事項に沿って授業改善を着々と進めている授業と、作品の説明や解釈を主とした従来の形態を踏襲した授業の二者である。二極化は授業時数の多い「読むこと」の学習指導で顕著である。公立中学校の国語科授業でも同様の傾向は多少みられものの生徒の多くが高校入試が控えているため、高等学校ほどではないと考えられる。

2 研究の目的

上記の諸点のうち、中・高等学校国語科の「読むこと」では論理的文章の性質に気づく学習指導が重要と考え、本稿ではそれを補う教材開発を目指す。旧来の授業は論理的文章と文学的文章との学習事項を区別せず、語句や文章の説明や解釈を重視してきた。論理的文章と文学的文章の機能や性質の違いを明確にし、「読むこと」の教材の提案は旧来の授業を改善する上で必要と捉えている。

3 研究の方法

研究の方法として、次の3点を設定している。

- (1) 論理的文章と文学的文章の性質を整理する。
- (2) 「論理国語」の論理的文章教材を検討する。

(3) 論理的文章の性質に気づく教材を提案する。

4 論理的文章と文学的文章

(1) 論理的文章と文学的文章の性質

論理的文章と文学的文章では、それぞれの性質や機能が全く異なる。そのため、文章ごとに学習方法や学習内容を明確化することが重要である。しかしながら、小山勉（2024）は経験豊かな国語科教員でも、論理的文章と文学的文章の「学習指導の違いを簡潔に説明するのは難しい」（日本教育新聞、2024年 9 月23日）という。両者は対照させると、それぞれの性質の違いが明らかになり、文章ごとの学習方針を決めやすい。文章の種類・単語・文・文章の単位・文体・文章構成（形式）という項目ごとに整理すると、次のようになる。

〔文章の種類〕	「論理」記録、報告、説明、論説
	「文学」物語、小説、詩歌等
〔単語〕	「論理」概念・定義の明確なキーワード
	「文学」日常的な単語
〔文〕	「論理」主語・述語・目的語等で成立する正確な構文
	「文学」実感表現のため、省略、婉曲等の表現技巧
〔文章の単位〕	「論理」段落
	「文学」場面
〔文体〕	「論理」明確に断定的な記述
	「文学」豊かな余韻、否定表現の尊重
〔文章構成（形式）〕	「論理」文章構成が決まっている。「序論・具体的事例・考察・結論」
	「文学」江戸時代までは物語（はじめ・なか・おわり）、詩（五・七・五・七・七）等、形式が決まっていた。 明治以降は形式も個性の表現とみなして、定型を嫌う。

(2) 論理的文章と文学的文章の学習内容

論理的文章と文学的文章の性質や機能の違いを重視して、その学習内容を整理すると、次のようになる。

学習内容	論理	文学
教材を「読む」	○※	◎
文章の感想を「話す・聞く」	◎	◎
文章を「話す」「書く」	◎	-

※「書く」ための手本とする。

国語科授業では論理的文章と文学的文章とは異なる性質や機能をもっているという考えから、学習内容を区別する。論理的文章では文学的文章に比べ、語句と文章の説明や解釈を重視して、最新の科学事情や社会情勢等を理解する学習に時間をかけてきた。このように文章内容を知識として定着させる学習は社会科や理科等他教科の学習である。論理的文章は「読む」学習から、「話す・聞く」「書く」学習までを教材の特性に合わせて、効果的に組み合わせ、指導していく。そのため、論理的文章は「書く」ための「読む」学習指導が重要である。上記の考えから、文学的文章を「読む」学習は「◎」であるのに対し、論理的文章は「○」となっている。

5 論理的文章の文体

優れた作品には確立した文体があり、それが個性の始まりである。このことは文学作品に限らず、論文にも同様にいえることである。優れた論文にも確立した文体が存在する。筆者の考え方は文章表現を構成する論理の組み立て方や、記述の仕方に表れる。

(1) 森鷗外

森鷗外は医学の中でも公衆衛生の都市論に関して活発な啓蒙活動を展開している。『衛生新篇』（第1版が1897（明治29）年、第5版が1914（大正3）年に出版）は豊富な知識と的確な見解とを備えていて、一つの具体的事例を一つの段落で示している。無駄な文言がない簡潔で明瞭な文体である。随筆も同様の特徴を見出すことができる。次に「サフラン」の一部を示す（以下、下線はキーワードを示し、稿者による）⁽¹⁾。

名を聞いて人を知らぬということが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある。（中略）

父は薬箆笥の抽斗から、ちぢれたような、黒ずんだ物を出して見せた。父も生の花は見たことがなかったかも知れない。私にはたまたま名ばかりでなくて物が見られても、干物しか見られなかった。これが私のサフランを見た初である。

二、三年前であった。汽車で上野に著いて、人力車を倩って団子坂へ帰る途中、東照宮の石壇の下から、薄暗い花園町に掛かる時、道端に筵を敷いて、球根からすぐに紫の花の咲いた草を列べて売っているのを見た。子供から半老人になるまでの間に、サフランに対する智識は余り進んでいなかったが、図譜で生の花の形だけは知っていたので、「おや、サフランだな」と思った。（中略）

去年の十二月であった。白山下の花屋の店に、二銭の正札附でサフランの花が二、三十、干からびた球根から咲き出たのが列べてあった。私は散歩の足を駐めて、球根を二つ買って持って帰った。サフランを我物としたのはこの時である。（中略）

すると今年の一月になってから、緑の糸のような葉が叢がって出た。水も遣らずに置いたのに、活気に満ちた、青々とした葉が叢がって出た。物の生ずる力は驚くべきものである。あらゆる抵抗に打ち勝って生じ、伸びる。（中略）

これはサフランという草と私との歴史である。これを読んだら、いかに私のサフランについ

て知っていることが貧弱だか分かるだろう。しかしどれほど疎遠な物にもたまたま行摩の袖が触れるように、サフランと私との間にも接触点がないことはない。物語のモラルはただそれだけである。

宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしていた。私は私の生存をしていた。これから、サフランはサフランの生存をして行くであろう。私は私の生存をして行くであろう。「サフラン」と筆者との三つの「接触点」はそれぞれの情景が目に見えるように描かれている。三つの経験と「サフランと私との間にも接触点がないことはない」という性質とが結びついている。終末の6行では「サフランという草と私との歴史」という、日常生活の一边を切り取り、「生存」という抽象的な概念を導き出している。

(2) 羽仁五郎

羽仁五郎(1901～1983)は近代日本の出発点を鋭く解明した『明治維新』を1940(昭和15)年
に書き上げている。その前年に刊行した『ミケルアンジェロ』(1939(昭和14)年)ではルネサ
ンスの本質から論を始め、「ミケルアンジェロ」の作品を綿密に言及している⁽²⁾。次に「ルネサ
ンスの本質は何か」の一部を引用する。

ルネサンス、といえば、諸君はなにをおもいだす。ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ。そう
だ。ルネサンスはダンテにはじまり、ミケルアンジェロにおわたった、といった人もある。ダン
テは"神曲"を書いた。"神曲"はダンテが地獄から煉獄を経て天国にみちびかれたありさまをう
たっている。それはダンテが祖国フィレンツェを熱愛しつつそこから追放されて各地を旅しつ
いにフィレンツェにかえることができなかった事実と関係があるかもしれない。また、地獄か
ら天国への解放は、地獄のような中世的封建的の社会からの解放の希望を、ダンテが意識して
いたかどうかは別として、そうした希望を反映していたかもしれない。ダンテが"神曲"をラテ
ン語で書かずに、あえて当時俗語としていやしめられていたイタリア語で書いたということは、
忘れられない。すなわち、彼は"神曲"という大作を、いまのわが国の例でいえば、漢語の多い
漢文調いわゆる文語体の文章で書かずに、かな文字風の口語で書いたのである。そしてそれ
によって、やさしいそして美しいイタリア語を、新しくつくり出したのである。(中略)

現に、イタリア・ルネサンスの文学の発展は絵画や彫刻や建築の美術の成長をたすけあった。
フィレンツェの建築家ブルネレスキはフィレンツェ市の育児院の設計をした。これはすて子を、
子供に罪はない、その可憐なすて子を養い育てるために、フィレンツェの絹織物業者組合の経
営者によってひらかれていたもので、この種のものとして世界でも最も早いものの一つ
(一四四四年に開かれた、日本では戦国時代)であるばかりでなく、そのやさしい美しさがま
たたとえようもない。(中略)

文学と美術とがあいたすけたばかりではない。そこには自然科学もならんですばらしい発達
をした。すでに、レオナルドが最初の飛行機の設計をしたばかりではなく、解剖学また光学
音響学水力学工学その他一般自然科学研究に新しい時代をよんだ。その後ガリレオがピサに生
れ、振子および落体および抛物体のガリレオの三大法則を発見し、力学を科学とし、経験の事

実の数量的分析と普遍の数学的法則の定立とにより総合的方法と分析的方法による科学的方法をひらき、その間に倍率三十二度の望遠鏡の創作に成功し、木星の衛星を発見して、コペルニクスの学説を実証し、保守思想とたたかったことは、諸君の知るとおりであり、彼の名著"新科学対話"は最近その訳本が"岩波文庫"からも出て多くの人に親しまれている。

そうした文学美術また自然科学の驚くべき発達は、思想の自由独立なくしては望めないことであった。もちろん、そうした成達は直線的に行われ得たのではなく、それらは希望と絶望とのジグザグの道をとらなければならなかった。(後略)

一つの段落が文学、美術、自然科学と一事項で書かれ、それぞれの典型的な人物としてダンテ、ブルネレスキ、ガリレオが取り出されていて、選定が確かといえる。彼らの功績が一定の見方によって詳細に述べられ、日本における書き方例、当時の状況、翻訳の出版を書き加えることで立体的にその実像を描き出している。各人物についてその生涯を網羅して表すのではなく、封建社会を批判し、その慣習と闘い、それを具体的な作品や発見として創出し、後世に残すという普遍的な意義を見出している。三事例の選ばれ方は広範囲にわたっているにもかかわらず、その特徴は共通していて、筆者は「文学美術また自然科学の驚くべき成達は、思想の自由独立なくしては望めない」という性質で端的にまとめている。

優れた論文では著者の壮大な研究や豊富な経験が多いに関係している。ところで、生徒個々に独創的で、個性的な文章を書かせたいと願う国語科教員は多い。このような教員は形式どおりで型にはまった文章は想像力の欠如と考え、自由な発想に基づく文章に価値を求めている。

6 高等学校「論理国語」の論理的文章教材

令和5年度の「論理国語」の教科書から、科学論文の形式を備えているかという観点で以下、論理的文章教材を挙げる。

(1) 2ページの論理的文章教材

令和5年度の『新編 論理国語』(大修館)には単元の冒頭に、見開き2ページの論理的文章教材が「例題」という示し方で4編、掲載されている。これまでの「現代文A・B」の教科書では掲載がほとんどなかった短い教材文である。4編の中で科学論文の形式を備える「米の種類と食文化」と「突然変異と進化の関係」の文章構成や特徴を示す⁽³⁾。

① 「米の種類と食文化」(『新編 論理国語』大修館)

段落		文章構成 (段落の役割)	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ (概要)	ジャポニカ・インディカ
2	二	なか1 (具体的事例1)	アミロース
3	三	なか2 (具体的事例2)	箸
4	四	なか3 (具体的事例3)	米を炊く・ゆでこぼす
5	五	まとめ (共通する性質)	日本の食文化が影響

ア 「序論・具体的事例1～3・考察」という報告の文章である。

イ 一つの形式段落に一事項が記述されている。

ウ 各段落の役割が明快である。

エ 各段落の主要概念を語句で取り出すことができる。

② 「突然変異と進化の関係」(『新編 論理国語』大修館)

段落		文章構成 (段落の役割)	キーワード
形式	意味		
1、2	一	はじめ (概要)	生物の進化では、遺伝子の突然変異に「方向性がない」
3	二	なか1 (具体的事例1)	キリンは「長い首をもつ固体」が突然変異で生まれた
4	三	なか2 (具体的事例2)	高い木の葉を食べるという生き方
5	四	まとめ (共通する性質)	自分の特徴に合った生き方を選択
6	五	むすび (主張)	系統が繁栄

ア 「序論・具体的事例1・2・考察・結論」という論説の文章である。

イ 一つの形式段落に一事項がおおよそ記述されている。

ウ 「なか1・2」は一つの意味段落と捉えることもできる。

エ 「まとめ」で「なか」の性質を「自分の特徴に合った生き方を選択」と導き出している。

オ 「キリン」の他に生物の例の記述があるとなおよい。

(2) 情報を題材とした教材

① 「デジタル地図から見える世界」(『新編 論理国語』大修館)

段落		文章構成 (段落の役割)	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ (概要)	地図は長らく「広げる」もの
2	二	なか1 (具体的事例1)	「印刷物 (出版物)」
3	三	なか2 (具体的事例2)	地理的知識を「広げる」
4	四	小まとめ (共通する性質)	世界についての知識やイメージを「広げる」
5～7	五	なか3 (具体的事例3)	「デジタルメディア」を通じて提供される地図
8、9	六	なか4 (具体的事例4)	G P Sが搭載された地図
10、11	七	なか5 (具体的事例5)	スマートフォンは個人の身体の一部
12	八	まとめ (共通する性質)	自己の身体を基準にして「現在地」とその周辺だけをまなざす
13	九	むすび (主張)	想像力を失いつつある

- ア 「序論・具体的事例1・2・小考察・具体的事例3～5・考察・結論」という論説の文章である。
 イ 具体的事例は大きく二つ (第1～4形式段落と、第5～11形式段落) に分けることができ、これらは対照的に書かれている。
 ウ 具体的事例3～5が冗長で、「G P Sが搭載された地図」の利点と欠点を軸に記述されていると分かりやすい。
 エ 考察と結論とは具体的事例からよく導かれている。

② 「人工知能の可能性と罫」(『論理国語』大修館)

段落		文章構成 (段落の役割)	キーワード
形式	意味		
1～4	一	はじめ (概要)	第三次ブームの人工知能は「論理的正確さ」が保証されてはいない
5	二	なか1 (具体的事例1)	第一次ブームの人工知能は論理機械
6、7	三	なか2 (具体的事例2)	第二次ブームは推論規則で組み合わせる
8、9	四	なか3 (具体的事例3)	第三次ブームはビッグデータを統計処理して確率の高い答えをだす
10、11	五	なか4 (具体的事例4)	「深層学習」
12、13	六	なか5 (具体的事例5)	自動分類できることだけ
14、15	七	なか6 (具体的事例6)	学習機械は他律システム
16、17	八	まとめ (共通する性質)	人工知能の内実とはビッグデータの統計処理
18	九	むすび (主張)	人工知能の活用には、人間の知恵が不可欠

- ア 「序論・具体的事例1～6・考察・結論」という論説の文章である。
 イ 第7形式段落までを序論と考えることができる。
 ウ 第一次ブームと第三次ブームの説明は簡潔で、その限界や問題点を示している。
 エ 具体的事例4から始まる「深層学習」の説明は意味段落に分けにくく、主要語句も見出しにくい。散漫な書き方である。
 オ 考察と結論とは現在の問題点を端的に指摘している。

(3) 自然科学・建築を題材とした教材

① 「弱肉強食は自然の摂理か」(『新編論理国語』東京書籍)

段落		文章構成(段落の役割)	キーワード
形式	意味		
1～4	一	はじめ(概要)	〈弱肉強食論〉
5～10	二	なか1(具体的事例1)	強さの尺度に何を選ぶかで結論は変わる
11、12	三	なか2(具体的事例2)	生態学における種間の強さの差
13～16	四	なか3(具体的事例3)	食う者と食われる者の個体数の関係
17～21	五	なか4(具体的事例4)	捕食者・被食者の関係を確認
22	六	まとめ(共通する性質)	生物学における強さは、個体数を減少させているかで決まる
23	七	むすび(主張)	ヒトがほかの種を絶滅に追いやることを正当化できない

ア 「序論・具体的事例1～6・考察・結論」という論説の文章である。

イ 題名には筆者の主張が簡潔に示されている。

ウ 具体的事例1は序論に入れることもできる。「生態学」を定義する以前の文章(第1～10形式段落)が長い。

エ 序論で「ヒトの戦闘能力がほかのいかなる種にも勝ることは事実」であると論じながら、そこから「ヒトがほかの種を絶滅に追いやることを正当化」できないと論証をしていく過程が鮮やかである。

② 「ヒトはなぜヒトになったか」(『高等学校 標準論理国語』第一学習社)

段落		文章構成(段落の役割)	キーワード
形式	意味		
1～5	一	なか1(具体的事例1)	ヒトの祖先、二足歩行、森
6～7	二	なか2(具体的事例2)	ホモ・エルガスター、平原
8	三	なか3(具体的事例3)	水がほとんど存在しない
9	四	なか4(具体的事例4)	食べ物の問題
10	五	なか5(具体的事例5)	道具を製作
11	六	なか6(具体的事例6)	共同作業、脳は著しく進化
12～15	七	なか7(具体的事例7)	前頭前野
16	八	まとめ(共通する性質)	脳の二度の拡張
17～18	九	なか8(具体的事例8)	二回目に脳が発達した時期
19	十	小まとめ(共通する性質)	好奇心

ア 「具体的事例1～7・考察・具体的事例8・小考察」という報告の文章である。

イ 具体的事例1、2は序論と考えることもできる。

ウ 具体的事例3～7と第16形式段落とはよく結びついている。

エ ヒトの脳の発達の過程を順を追って説明しているが、段落の区切れが分かりにくい。

オ 第17形式段落以降の「二回目に脳が発達した時期」の記述はなくてもよい。

③ 「科学の現場」(『論理国語』数研出版)

段落 形式	意味	文章構成 (段落の役割)	キーワード
1、2	一	はじめ (概要)	仮説の設定
3、4	二	なか1 (具体的事例1)	仮説検証型研究
5～7	三	なか2 (具体的事例2)	パラダイム論
8	四	なか3 (具体的事例3)	現代科学、プロセスとしての科学
9	五	まとめ (共通する性質)	生身の研究者が行っている科学研究の過程

ア 「序論・具体的事例1～3・考察」という報告の文章である。

イ 「探究の扉」という小単元「比べ読み」の一教材として置かれている。

ウ 4ページという長さで、文章の全体像を把握しやすい。

エ 具体的事例3を考察に組み入れることもできる。

オ 具体的事例1、3は用語の説明が多く、医学等での事例が示されると、「生身の研究者が行っている科学研究」を理解しやすい。

④ 「コンクリートの時代」(『新 論理国語』三省堂)

段落 形式	意味	文章構成 (段落の役割)	キーワード
1、2	一	はじめ (概要)	コンクリートの時代
3、4	二	なか1 (具体的事例1)	場所を選ばない
5、6	三	なか2 (具体的事例2)	どんな造型をも可能にする
7	四	なか3 (具体的事例3)	表層の自由
8	五	なか4 (具体的事例4)	同一化
9	六	なか5 (具体的事例5)	突然に固まる
10、11	七	まとめ (共通する性質)	不連続な時間を求めた
12	八	むすび (主張)	固定化は不安定なものに不自然な足枷をはめる

ア 「序論・具体的事例1～5・考察・結論」という論説の文章である。

イ 具体的事例1～5はコンクリートの利点と欠点に分けることもできる。

ウ 具体的事例1、2では実際の建造物や学生の図面という実例があり、分かりやすい。

エ コンクリートの性質から「不安定なもの」が「固定化」という問題点を導き出している。

7 文章構成を意識できる教材

(1) 「論理国語」の論理的文章をリライトした教材

これまで、生徒が書いた400字以内の作品に基づき、作品全体が一目で見渡せる教材を作成し、ワーク集にまとめた⁽⁴⁾。ところが、大学3、4年が文章構成を曖昧に捉えていると分かり、中学3年から高等学校にかけて800字程度で全体像を把握しやすい文章も必要と考えている。次に示す「ゾウとキリン」は、「6(1)②」の「論理国語」の教材「突然変異と進化の関係」を書き直している⁽⁵⁾。書

き直しの要点は、第一に「突然変異と進化の関係」では具体的事例が「キリン」一例であるため「ゾウ」を加えている。第二に結論で不明瞭な箇所があるので考察に組み入れている。

ゾウとキリン (報告)

生物の進化では、遺伝子の突然変異に方向性がないということが重要である。突然変異はランダムに起こるため、その種や個体にとって、生き延びやすい方向の変異と、生き延びにくい方向の変異とが起こる。 (はじめ)

約六〇〇〇万年前にいたゾウの先祖は、今のバクに類似した動物で、鼻も短かった。この頃、ゾウの先祖は湿地や森林に棲んでいた。しかし、長い間に生活の場を草原に移し、次第に巨大化した。そのような中で、鼻が長いゾウが突然、誕生した。この突然変異はランダムに起きている。体が巨大すると、水を飲むのにしゃがむのでエネルギーを消費し、他の肉食動物から狙われる危険が増す。そのため、徐々に鼻が長いゾウの系統が生き残り、数が増えていった。そして、ついに鼻の長いゾウが生き残り、現在ようになった。 (なか1)

同様に、進化論の考え方でキリンの首が長いのは、長い首をもつ個体が突然変異で生まれたからである。キリンの頸椎骨の数は人間と同じ七つであるのに、首が長くなったのは、一つ一つの頸椎骨のサイズを大きくするような突然変異がランダムに起きたからである。変異を起こした遺伝子が子孫に伝わり、首の長いキリンの系統できた。首の長いキリンの先祖は長い首という特徴を生かし、高い木の葉を食べるという生き方を選択したのだろう。その選択が結果として功を奏し、首が長くなったキリンが生き残ることになった。 (なか2)

自分の特徴に合った生き方を選択できたから、現在の種族は生き延びてきている。新しく備わった特徴をいかせるように祖先は努力して生き方を変えてきているのである。 (まとめ)

〔学習課題〕

問1 声をそろえて読みましょう〈一斉音読〉。

問2 段落に番号をつけましょう〈段落〉。

問3 段落のキーワードに傍線を引きましょう〈キーワード〉 解答：教材文で下線を引いた箇所。

問4 「はじめ・なか・まとめ」に分けましょう。「なか」はいくつありますか〈文章構成〉 解答：二つ。

問5 黒板に書いた段落、文章構成（段落の役割）、キーワードをノートに書きましょう〈ノート〉。

(2) 随筆・論文のリライト教材

① 随筆

森鷗外の「サフラン」の書き直しの要点は第一に「サフラン」の三つ具体的事例のうち、印象深い二例を選んでいる。第二に「去年の……」から始まる具体的事例2は、「青々とした葉が叢がって出た」情景が中心の場面となるようにしている。

サフラン (論説)

名を聞いて人物を知らないということが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある。

(はじめ)

本好きだった私が子どものときに、名前を知っていて物を知らないもの一つに植物のサフランがあった。蘭和対訳の辞書で引くと、漢字で「泊夫藍」と書いてあった。父に聞くと「花を取って干し物に色を附ける草だ。見せて遣ろう。」と言った。父は葉簞笥の抽斗から縮れたような黒ずんだ物を出して、見せた。父も生の花は見たことがなかったかも知れない。私にはたまたま名ばかりでなくて物が見られても、干物しか見られなかった。これが私のサフランを見た初である。

(なか1)

去年の十二月であった。白山下の花屋の店に、二銭の正札附でサフランの花が二、三十、千からびた球根から咲き出たのが列べてあった。私は足を駐めて、球根を二つ買って持って帰った。サフランを我物としたのはこの時である。花は二、三日で枯れ、鉢の上には袂屑のような室内の塵が一面にかぶさった。今年の一月になってから、緑の糸のような葉が叢がって出た。水も遣らずに置いたのに、活気に満ちた、青々とした葉が叢がって出た。物の生ずる力は驚くべきものである。

(なか2)

これはサフランという草と私との歴史である。どれほど疎遠な物にもたまたま行摩の袖が触れるように、サフランと私との間にも接触点がないことはない。

(まとめ)

宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしていた。私は私の生存をしていた。これから、サフランはサフランの生存をして行くであろう。私は私の生存をして行くであろう。

(むすび)

② 論文

羽仁五郎の「ルネサンスの本質」の書き直しの要点は第一に新書からルネサンスの典型な事例を選び作品を、具体的事例としている。第二に、二例から導き出すことのできる考察と結論とを新書から探している。

ルネサンスの本質（論説）

ルネサンスの時代は文学や絵画、彫刻、建築の美術が互いの成長を助け発展した。（はじめ）

「神曲」はダンテが地獄から煉獄を経て天国に導かれたありさまをうたっている。それはダンテが祖国フィレンツェを熱愛しつつ、そこから追放されて各地を旅し、ついにフィレンツェにかえることができなかった事実と関係があるかもしれない。「神曲」をラテン語で書かず、あえて当時俗語として卑しめられていたイタリア語で書いた。彼は「神曲」という大作を今の我が国の例でいえば、漢語の多い文語体で書かず、仮名文字風の口語体で書いた。それによって、やさしい美しいイタリア語を作り出した。

(なか1)

ブリューゲルは貴族のために描くことしかしない中世的な画家たちの中にあって勇敢にそうした貴族主義の誘惑にかち、今まで画の上に全く描かれたことのない農民民衆の姿を生き生きと描いた。ルネサンスの絵画に新生面を開き、中世の絵のゆきづまりを打破したばかりでなく、奴隸的な美術から本当の美術を救った。ブリューゲルは農民の子で、彼には苗字もない。彼の作品「夏」には麦を刈り、弁当を食べ、木の下に手足を投げ出して休む男女を描いた。

(なか2)

ルネサンスの時代は壮大なる歴史の展開に成功した。それはあらゆる種類の貴族的封建的な

独占を打ち破って、ついに出現した民衆の近代的成長が真理の美と力との源泉を成したからであった。(まとめ)

ルネサンスの本質は封建専制に対する国民民衆の自由独立の実現の希望であった。それなくしては、ルネサンスもないばかりでなく、近代も現代もなくなって、中世の圧政に戻ってしまう。(むすび)

(3) リライトする際の留意点

論理的文章をリライトする際の留意点は以下の4点である。

- ① 文章からテーマに合う典型となる具体的事例を二つ以上、見つけ出す。違う例を複数並べ、印象深い例を文章の後半に置く。
- ② 具体的事例では場面の中心を一つ決め、そこを詳細に書く。具体と抽象に差がある事例がのぞましい。
- ③ 複数の具体的事例に共通する性質を取り出し、考察として述べる。
- ④ 具体的事例と考察から導き出すことのできる序論と結論を書く。

8 文体の違いに気づく教材

中学3年から高等学校1年を対象とした学習課題を以下に示す(プリントにし、縦書きとする)。

〔学習課題〕

文学の言葉は単語で詩的イメージを起こさせる働きがあるのに対し、論理の言葉は単語で概念を示しています。例文「イ」は1行が一つの段落となり、「太郎を……」という1行と、「次郎を……」という1行は、ともに独立した一つの段落です。これらは「雪」が降り積もる、二つの情景をイメージとして読み手に呼び覚まします。

例文「ロ」は「雪」を主要概念とした一つの段落から成り立っています。「吹溜の雪が音もなく崩れてコンクリートの上へ流れ落ちる」という現実が、雪国の厳しさを示しています。

例(イ) 太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

(ロ) 札幌の一月は大体気温は零下七、八度位である。凍りついた引戸を無理にあけると、廊下のコンクリートの路面から二尺位も積上っている吹溜の雪が音もなく崩れてコンクリートの上へ流れ落ちるのであった。

〔問〕 次の(1)から(5)の二つ一組のうち、文学の言葉に○をつけましょう。

(1) (ハ) ウナギのたまごを産む場所をさがす調査は、より小さいウナギを追い求めることから始まりました。調査では、目の細かい大きなあみを使って、海の生き物を集める作業をくり返します。あみの中には、さまざまな色や形の小さな生き物が入ります。この中から、レプトセファルスとよばれる、ウナギの赤ちゃんをさがすのです。

(ニ) あたたかき鰻を食ひてかへりくる道玄坂に月おし照れり

＊

- (2) (ホ) 私は平生は大学内の食堂でセルフサービスの定食を食べていたが、大学と方角の違う国立国立図書館に調べに行くことに決めていた土曜は、毎晩、宿の近くの小さなレストランで夕食を取るほかなかった。その店はぜいたくではないがパリらしい雰囲気があり、席も十人そこそこしかない小さな手作りの料理店であった。白髪の母親が台所で料理を作り、娘が接客を受け持ち、二人だけで切り盛りしていた。毎土曜の夕食をそこで取っていたから、二か月もすれば顔なじみになった。

- (ヘ) ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままる旅にいでてみる。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしのめ
うら若草のもえいづる心まかせに。

＊

- (3) (ト) 高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこでいとま乞いをするを許された。それから罪人は高瀬舟に乗せられて、大阪へ回されることであった。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類のうちで主だった一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であった。

- (チ) リアス海岸特有の、波静かな入り江が続く宮城県沿岸は、広島県と並ぶ日本有数の牡蠣の産地である。宮城県がなぜ牡蠣の産地なのかといえば、いかだを浮かべられる静かな湾が多いことによるのはもちろんだが、種牡蠣の世界的産地でもあるからだ。この種牡蠣は、北上川河口の石巻湾で多くとれるので、宮城種と呼ばれている。それは、成長が速く、味もよく、病気に強いという三拍子そろった優良種だ。

＊

- (4) (リ) 日本人はロジックが嫌いです。日本でロジックが通用するのは、あくまでもたてまえの世界だけで、本音の世界は、腹でさぐらねばなりません。こうして日本人は腹芸が上手になり、なにかたくらみがあれば腹にかくし、我慢ができなければ、腹にすえかね、そして最後に腹が決まって実行するのです。その間、頭は一度も出てきません。

- (ヌ) ひゅうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中ったなと思ったら、後ろからも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出て居る、打て打てと云う声がある。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を投げろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍に居た師範生の頭を張りつけてやった。石が

又ひゅうと来る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行った。

＊

(5) (ル) むかし、まだ、ねがいごとがかなったころ、ひとりの王さまがくらしていました。王さまのおひめさまは、みんなきれいでしたが、とりわけ、一ばん下のおひめさまは、たいそうきれいだったので、ずいぶん、いろいろなものを見てきていたお日さまでさえ、そのおひめさまの顔をてらすたびごとに、おどろくほどでした。

(ヲ) 君たちはモアイを知っているだろうか。それは、人間の顔を彫った巨大な石像であり、大きなものでは高さ二十メートル、重さ八十トンにも達する。モアイは、南太平洋の絶海の孤島イースター島にある。イースター島は、日本の種子島の半分にも満たない大きさの火山島だ。この小さな島で、これまでに千体近いモアイが発見されている。

(解答：ニ、ヘ、ト、ヌ、ル)

9 論理的文章の性質に気づく教材

本稿では科学論文を構成する要素である文章構成、段落、キーワード、事実の書き方等を、論理的文章の性質と捉え、その性質に気づく教材を作成し、示してきた。論理的文章の性質に気づくためには文学的文章と対照させながら、それぞれの性質を備えた文章の比較により、その習得が確かになると考えて、学習課題を提案した。今後は中・高校生が、作成した教材を実際に取り組んだ後、改善の方向を提唱していく。

「注」

- 1、 千葉俊二編 (2000) 『鷗外随筆集』 岩波文庫、8-12.
- 2、 羽仁五郎 (1939) 『ミケルアンジェロ』 岩波新書、6-8.
- 3、 長谷川祥子 (2020) 「中・高等学校国語科における論理的文章を書くための教材の開発」 青山学院大学教育学会『教育研究』 第64号、1-19.
- 4、 長谷川祥子、加賀谷いづみ、西山明人編著 (2021) 『論理的思考力を育てる！書く力・考える力アップワーク 中学校』 明治図書
- 5、 市毛勝雄編 (2002) 『論理的思考力を育てる段落指導用 (リライト) 教材集成』 明治図書